

男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために（その6）

-男性性をめぐるある青年の生きづらさの体験分析-

For Gender-Sensitive Clinical Approach to Wounded Masculinity

(6) An experience Analysis of a Young Male : A Survival from Masculinity Crisis

國友万裕（同志社大学）／中村正（立命館大学）

Kazuhiro Kunitomo (Doshisha University) / Tadashi Nakamura (Ritsumeikan University)

Key words: 言葉のない問題、悩みの閉塞、男らしさの負荷 /

speechless, sense of stagnation, burden of masculinity

1. 課題：男性性ジェンダー論による青年の体験の考察-言葉のない問題を照らし出すこと

ジェンダー社会における女性の被抑圧的地位に由来する被害は、女性学・フェミニズムの視点から社会的に認知されているが、男性に関わる諸困難についての認識が同じ程度になされているとはいえないし、その必要性についてでさえ懐疑的な論者もいる。男性が何らかのジェンダー関連の被害、不利益もしくは臨床的ニーズを訴えると、本人の意識や行動の特性に帰責されてしまい、社会的な位相において認識をすることが困難になる。問題の隠蔽・否認、自己責任化等という諸点において二次的加害の様相をジェンダー作用は男性に屈折した様相をもたらす。被害待性を訴えられないことが、男性の最大の不利益な部分だと考える。そこで、男性問題の特性をきちんと取り出し、ジェンダー社会における対人援助や臨床実践の裾野を広げる必要がある。そのために現在 50 歳代となったある男性の経験の分析を行っている一連の研究である。今回は、男性性ジェンダー役割に適応できずにいる「彷徨経験」の諸相について考察する。男性性ジェンダーの自己同一性構築に困難をもたらすという観点からの心的苦痛と名付けの作業を行う。

2. 方法と分析：男性性研究によるエピソード分析

ある男性の 20 歳代の人生経験の意味を男性性の視点から考察する。主観的には否定的な体験の相互作用の機微を一つずつ細解いていく。微視的な体験の考察をおとして、そこに機能している男性性ジェンダー作用を分析し、男性性体験の連続体・多様性を読み解きたいと思う。ある男性の男性性ジェンダー違和感のエピソード記述をもとにした概ね 20 歳代にわたる成人期スタート時点での男性性ジェンダーの視点からライフストーリーを読みといていく。「その5」での分析と考察はジェンダー論が隆盛し始めた 1980 年代から 90 年代であったのでそれに続く時期である。

男性性ジェンダーという言葉もない社会のもとで、不定愁訴のような言葉のない問題を生きにくさとして抱えていた様子が見えてくる。以下、いくつかの詳細な出来事の中括弧にし、7 つに言語化したエピソードを取り出した。それはまだ名前のない苦悩のなかを生きたことの振り返りの言葉でもある。

①普通になりたい（普通になりたいという言葉で自縄自縛風に苦しむ。毎日が嵐のような心の葛藤。しかし、高校までの不登校のブランクは大きく、糸口が見出せない。大学は基本的に横のつながりが希薄であり、コミュニケーション能力にかけているため居場所がない）

②見えない壁（当時は、また現在よりもライフスタイルの多様性が認められ

ておらず、定められたルールの上を歩いていくというイメージであった。大勢的な生き方をしたいと思うのだが、何が普通なのか分からず、友達もなく情報も入らないため、何をしても何かがわからない。呻吟もいえる。）

③徘徊（誰かに声をかけてもらいたいという気持ちと何らかの糸口を見出したいという気持ちで、大学の中をあてもなく徘徊する。しかし、糸口は見つからず、用もないのにウロウロしている人という陰口を言われ、白眼視される）。

④ピアへの恐怖（将来の目標が定まらないため、大学院に進学するが、20 代男性の規範とは大きく外れているため、劣等感を刺激されることを恐れて、他の学生たちとの交際を避ける。刺激への過剰な反応）

⑤独り言（博士課程に入ってから、大学には 1 日しか通わず、完全に情報を遮断した生活を送る。誰とも交際せず、アルバイトもせず、図書館に通う。下宿や公園など徘徊する場所で過度の独り言を言う。周りからは不審に思われていたはずだが、自分の内面にこもっていたため、周りに気付かない）

⑥その日暮らし（将来のことを考えると心が乱れるため、1 日乗り越えることのみを意識を集中させ、奨学金と仕送り、細々とその日暮らしの生活を送る。）

⑦ジェンダー論がない（当時はまだ男性ジェンダーに対する認識がなく、自分の支えになる理論もない。自我がない。ある意味、時代の先端であったため、誰も理解してくれない。言葉がないことの象徴がこれである。）

3. 考察

男性性の傷つき（被害待性や脆弱性）に敏感な男性性ジェンダー論の展開にとって、自我同一性・アイデンティティ概念は再考されなければならないと考える。女性性ジェンダーについても同様な問題提起があった経過に鑑みれば重要な作業となる。さらに「LGBT/QX」についても同様である。これらのエピソードはジェンダー概念が登場しつつあった時代の裏面から、沈黙化しがちな男性性ジェンダーの可視化として位置づけることができる。

文献：

國友万裕 「男は痛い！」『対人援助学マガジン』（連載）

中村正 「不安定な男性性と暴力」、『立命館産業社会論集』、52 巻 4 号、2017。

（PDF ダウンロードできます）